

スなのか、という研究に取り組む中で常に突きつけられる課題、私自身がなんとなく逃げてきた課題に真摯に向き合わなければならないのだと確認することとなった。

2017年春季大会報告

2017年3月27日(日)に大阪大学(豊中キャンパス、法経研究棟7階大会議室)にて2017年春季大会が開催された。

第一部は岩下誠氏(青山学院大学)司会のもと、「犯罪者のリテラシー」セッションが開催された。報告者は経済史の山本千映氏(大阪大学)と教育史の三時眞貴子氏(広島大学)の二人であり、その共同研究を「産業革命期イギリスの識字率-スタッフォードシャーの事例-」というタイトルで報告した。コメンテータとして、イギリス犯罪史から林田敏子氏(摂南大学)、日本のリテラシー研究から八鍬友広氏が登壇された。

第二部は、本研究会の創設時より本会の活動の中心を担ってこられた松塚俊三先生の退職を記念する講演会を開催した。イギリス史とイギリス教育史を架橋し、イギリスの労働者研究を牽引してこられた松塚俊三先生にご自身のご研究を振り返っていただき、続いて第三世代を代表する二人、イギリス史から金澤周作氏(京都大学)、イギリス教育史から岩下誠氏(青山学院大学)が先生のご研究を継承するだけでなく、それをどのようにして乗り越えていくのか、という視点からコメントを行った。

これらの詳細は、以下の報告をご参照ください。

三時眞貴子・山本千映『19世紀前半のスタッフォードシャーにおける識字率-産業革命の影響と犯罪少年-』セッション参加記

磯野将吾(大阪大学大学院 院生)

2017年3月26日、大阪大学経済学研究棟にて2017年春季例会が開催され、第1部は三時眞貴子氏・山本千映氏による『19世紀前半のスタッフォードシャーにおける識字率-産業革命の影響と犯罪少年-』という題で報告が行われた。副題にあるように、当報告は同一史料を三時・山本両氏それぞれの関心による、「産業革命期を通じた識字の変化」・「少年の識字の獲得・向上・喪失」という二つのテーマからなっている。両名による報告後、林田敏子氏や八鍬友広氏らが報告に関する論点や質問を提示する形でセッションは進行した。以下、報告の概要、議論の状況等について概略していきたい。

両氏の報告の目的は、19世紀前半の犯罪少年の識字率を主として質的側面から明らかにすることである。従来の研究では、主に結婚登録簿における自著の有無によって識字能力の有無を判断していた。同史料の対象年齢層は21-30歳と限られたサンプルである。しかし、それではリテラシーというものの一部しかわからなかった。なぜなら読み書き能力というのは、優れたものから劣っているものまで連続的に存在し、単純に二分することはできないからだ。また、時代・職業・年齢など様々な状況に応じて求められる能力の程度は異なるため、一部の年齢層だけを見て全体を判断することは難しい。当研究はそのような課題を見直し、詳細な識字の実態を映し出すことを目指している。

両氏の報告で利用された史料は1777年から1860年のスタッフォードシャーの四季裁判所の記録であり、そこでは読み・書きの程度がそれぞれ多段階で評価されている。またサンプルの年齢幅も7-87歳と幅が広く（サンプル数13,272件）、先に挙げたような問題をクリアしているという。

この史料の分析の結果、サンプル全体の半分以上が半識字者（Reading, Writing imperfect）であることが分かった。非識字率は男性3割、女性が4割程度であった。山本氏の関心である「産業革命と識字率の関係」と照らし合わせ、時系列でみると、産業革命期を通じて男女ともに、識字の質の低下がみられた。これは実質賃金や平均余命といった他の生活水準指標が停滞、もしくは悪化していたとする他の研究結果と整合的である。その他に、年齢が高くなることと、出生年代が後ろに下がることの識字率に対する影響を順序プロビットモデルによって分析した。これによれば、年齢が上がるほど識字能力が獲得・向上する確率が上昇し、おそらくそのピークは30代から40代であるという。

また三時氏の分析によれば、男子は9歳、女子は10歳で識字能力を持つサンプルが現れ始めることから、読み書きのできない状態(illiterate)から識字能力を獲得する機会を得るのはその頃ではないかと考えられるという。また、犯罪者全体の識字率はVincent(1989)の非熟練労働者男性の識字率と比較してもそれほど低くないということから、「識字能力の低さが犯罪を導く」というような一般に言われるようなイメージは、このデータからは得られないとも述べた。その他に三時氏はわずかな例ではあるものの、識字能力の喪失が見られる事例を示した。報告では二人の事例を紹介し、両者は二度裁判記録に登場し、一度目が「Reading, Writing imperfect」であったのに対して、二度目は「Reading imperfect」と書き能力の「喪失」が起きていた。これは識字能力が保持し続けられるものではなく、状況によっては失われる恐れのあるものということを示している。喪失への着目はリテラシーの機能面への着目であり、識字に関する研究のより広範な可能性を示唆している。

両氏による報告ののち、質疑応答が行われた。以下では、コメンテイタらによる指摘とそれに対する両氏のリプライについて記していく。

警察史が専門である林田氏からは犯罪の種類と識字率との関係性に関する質問がされた。つまり、「犯罪記録に記載された人々が、果たして同時代の母集団の性質を反映しているのか」というサンプルの代表性に関する問題である。これについて山本氏はサンプルにおける比較的軽微な犯罪者に関しては、より一般的であると述べた。またVincent(1989)による同時期を対象とした結婚登録簿を利用した研究と、本研究の識字の有無で考えた場合の結果との乖離が小さいことから、妥当性があるとも主張した。し

かし、報告者らが認めるように、識字能力の測定方法や、「犯罪」概念の時代を経た変化など考慮しなければならない問題も多い。

日本のリテラシーおよび教育史が専門である八鍬氏は同時期の日本における識字率の研究を例に挙げコメントした。氏によれば、日本においても同様な識字の程度を明らかにする史料が存在し、識字の有無だけでなく、往来文が書けるか、姓名が書けるか、また四則計算ができるかどうかなど識字能力の程度に加えて、計算能力の程度も含めた3R（読み書き計算）が分かるという。ここで重視されていたのは、手紙の読み書きなど識字の実用面であり、こういった視点は今回の報告の視点とも重なる。

これまでは史料的制約により、リテラシーは、その有無という二分法で考えられることが主であった。しかし、今回の三時・山本両名の報告により、詳細な識字の実態を明らかにした。報告を聞き、さらに知りたいと感じたのは識字というものの同時代人にとっての重要性である。犯罪記録で読み書きが分けられ記録されていたということは、その必要性が認知されていたということである。19世紀前半において、読みと書きとは、需要やその保持することのステータスなどによって、どのように区別され、またその間にどれだけの隔たりがあったのかということが気になる。これは山本氏が指摘していた、識字が教育だけでなく、職業やOJTにおいてどのような意味を持っていたかという問題にもかかわってくる。そして、三時氏が示した識字の喪失が起きている可能性を示唆した。これは、リテラシーが獲得して終わりのものではなく、如何に用いられていたかという「機能」という、識字能力のダイナミクスを考える上で重要な論点であろう。

講演・松塚俊三「研究を振り返って」参加記

松隈達也（福岡大学・非常勤講師）

私（筆者）が初めて松塚俊三先生と「出会った」のは学部1回生のときだった。専門科目「西洋史研究入門」で読んだテキスト、『社会史への途』（有斐閣選書、1995年）の第5章「学校をみずからのものに」を執筆されていた。松塚先生の文章は、受験勉強を終え、ようやく大学生になったばかりの私に、驚きと新鮮さを与えてくれた。例えば、

「（炭鉱労働で疲労困憊した）子供たちの中にすら、寝る前の一時間を削り、夜学に通うものたちがいた。あるいは、就労前のわずかな期間を利用して近所のおばさん学校（デイム・スクール）に通う者たちもいた。」（前掲書、243頁）

など、主人公は労働者、民衆、子ども。民衆たちの主体的な学び、彼らなりの知識の受け止め方・学校の利用の仕方、また相互扶助の結果である教師といった説明は、高校世界史とはまるで異なる歴史叙述だった。何より、文章を読み進めると、19世紀イギリスの民衆世界の絵が浮かんできて、子どもたち・おばさんたちを想像することができた。

前置きが長くなってしまったが、学部生のときの感動をあらためて思い出す機会を得た。2017年3月27日、退職が目前に迫った松塚先生の講演を拝聴したからである。松塚先生は長年にわたって本研究会を牽引されてきた一人であり、イギリス近代の民衆教育史、都市史・地域史、自由主義国家論、リテラシー研究などで多大な貢献をされてきた。以下では、①講演の概要、②コメントや全体討論、③私の感想を順に述べたい。

イギリス社会史研究のバイブルである E. P. トムソンの *The Making of the English Working Class* (1963年) の圧倒的影響を受けて、「研究らしきものを始めた」とする松塚先生が、1970年代に着手したのはロンドン通信協会の研究、そしてイギリス民衆的急進主義の運動家トマス・スペンス研究だった。スペンスの思想や行動を千年王国主義の枠組みで再考し、福音主義的な民衆の変革への期待がスペンスの根底にあったと指摘した。ここには大学闘争を経験した世代の感性、自律的な民衆へのこだわりが色濃く反映されている。他方、強調されたのは、異質で多様な人々を、民衆、階級、ピープルという言葉で一つの変革主体にまとめ、言語の能動的役割を実践していた、ということだった。

1980年代になると、トマス・スペンスを生み出した都市ニューカッスルの歴史、北東イングランドの地域史研究に重点が移った。「一番深入りした領域」との言葉どおり、地方政治史、コーポレーション、炭鉱・鉄道・金融などの地方経済史、科学史、宗教史、都市・地域のありとあらゆる事象に関心が向けられた。例えば、2名選挙区であるニューカッスルの投票者名簿を手作業で集計・分析し、ホイッグの政治的結集、人的結合、都市の利害関係を明らかにするなど、緻密で詳細で具体的な研究を生み出している。同時に印象深いのは、「論文にならなかったことをたくさんした」との言葉であった。

1990年代～2000年にかけて、民衆史、都市史、地域史の蓄積に、イギリス国家論が加えられた。19世紀の自由主義国家と近世以来の民衆文化史の出会いは、ニューカッスルという地域社会を舞台に具現化された。その成果が『歴史のなかの教師』（山川出版社、2001年）である。理論的・制度的な叙述はさることながら、ニューカッスルの初等教育に関わる具体的諸相や教師の物語が鮮やかに描き出される。「意味ある細部」という信念は「周縁的であるデイル・スクール」に光を当て、「全体の構造の見直し」を迫った。国勢調査の調査員原簿、師範学校への願書・推薦文・手紙に基づく徹底した史料実証主義のスタイルは瞠目に値する。

2000年以降の識字と読書の社会史研究では、19・20世紀のイギリス労働者階級の独学の文化、労働者階級のセクシュアル・リテラシーの成果を生んだ。労働者階級の独学の文化は、自らの知的・精神的独立を目指す文化であり、そのために彼らは連帯し、個別利害を超える「普遍的な文化 common culture」のあり方を模索し続けたのだという。

なお、地域（史）に向き合う姿勢には九州、福岡も含まれていた。七隈史学会（福岡大学歴史学科）、九州歴史科学研究会、そして九州の記録文学が紹介され、「地域というのは研究対象でもあり、自分自身の生き方の問題でもあった」と説明された。研究者、そして教育者としての姿がそこにはあった。

講演につづき、金澤周作氏と岩下誠氏から多彩なコメントが寄せられた。紙幅の都合上、主な論点のみ提示することをお許し願いたい。

金澤氏の論点は世代に関するものだった。一つは、松塚先生世代（60歳代）と30・40歳世代とでは民衆に対する捉え方が違うとの指摘である。同じ「民衆観」を共有しているわけではなく、それゆえに後進が似たような民衆理解で教育史を追究することはできないと警告した。新しい世代の考える民衆とは何か。海の民、浮浪者、外国人、棄民は民衆とカテゴライズできるのか、との問いを投げかけた。いま一つは、トマ・ピケティや中野義之に触れつつ、松塚世代の歴史研究を福祉国家全盛期の特異な歴史学と指摘し、こうした特異な歴史学をどのように相対化していくのか、と問題提起した。

岩下氏は教育史の立場から、より焦点を絞った。一つは、デイム・スクール＝民衆的な共同性で支えられるもの、公教育＝市場原理で成立、という図式はどこまで妥当性があるのか。二つ目に、「全体の構造を見直す」努力をさらに進めるべきと主張した。つまり、階級横断的な「普遍的な文化 common culture」「self-improvementの思想」を19世紀にとどめず、むしろ20世紀前半の公教育、すなわち専門職や官僚統制によって支配される時代にこそ当てはめ、社会史を描くべきではないかとの提起であった。

両氏に対する松塚先生の返答および全体討論では、まず民衆の捉え方について議論された。三時眞貴子氏は「今の私たちは民衆として関わっているのではなく、私の場合だと浮浪児として、障害児として関わっている。社会のなかで排除されたり、難しい問題を抱えている人を対象にして主体の形成を考え、そこに共感がある」と述べた。乱暴に一括りにされてきた民衆や階級を、等身大のところから丁寧に捉え直し、共感や共鳴する部分を見出し、「下からの歴史」を継承・刷新しようとの方向性が打ち出された。

次に議論されたのは、八鍬友広氏が発した「福祉国家全盛期の、特異な時期の歴史像というならば、その後に来るであろう特異でない歴史像をどのように考えているのか」という問いだった。これに対し、金澤氏は自身の研究から「70・80年代の人には想像つかないだろうが、国家福祉段階でゴールとならない歴史をやる」とし、「慈善研究のなかで富裕者が支配者、受給者が民衆という切り分け方はできない。それぞれのカテゴリーの人たちが各々利害をぶつけ合う社会ではなく、人々は磁場に引き寄せられ、何かしらの行動を起こす。この磁場の構成のされ方が時代や地域の個性を描くのだろう」と応えた。松塚先生は「人間集団の線の引き方は時と場合、問題、利害関係によって、きわめて複雑でどのようにも引かれうる。その引かれる線が力関係のなかで大きな意味をもったりする。もっと根本的な問題は主体・個人自体がきわめて重層的で、本当にいろんな側面から考えなければならぬ。今の歴史学は光の照らし方で個人の主体性も何層にも見えるという難しさがある。」と、特異な時期の歴史像を相対化する一つの手がかりを示した。

講演と全体討論から、私は二つのことを考えた。一つは岩下氏が強調したこと。つまり「民衆なのか、労働者なのか、それをどんどん分解させて、個別のマイノリティの歴史に細分化して、そこに固有の問題を発見する。そういうストーリーを個別に積み上げていく。それは正しいことだと思う。でも、私（岩下氏）はいわゆる普通の公立学校の、普通の教師がそういうマイノリティをも含めた人々に、ごく普通に対応しているところに普通の構造を見出す」と、「普遍的な文化 common culture」にこだわったこと。もう一つは、金澤氏が『イギリス文化史』（昭和堂、2010年）所収の「連合王国の教育文化史」の最後の一節を読み上げ、「これが書けて、みんなが納得するのが松塚史学」と、話を結んだこと。

「普遍的な文化 common culture」とは何か。「松塚史学」とは何か。当日参加した40名ほどのオーディエンスはどのように考えただろうか。私なりの答えは、やはり松塚先生の言葉のなかにあった。普遍的で共有されるべき文化とは、真・善・美を求める精神、人格の完成を目指す精神、人間の尊厳、生きる力、自由であること。これらを歴史のなかに・民衆世界から問い続け、追求されてきたのが松塚史学ではなかろうか。それゆえ色褪せない研究的価値を保持されているのではないか。松塚先生のご研究をもう一度読み直してみたくなった。

連絡事項

皆様のご協力のおかげで、新しい方や院生の方も増えてきました。本研究会は、いろんな領域の研究者が集まって議論することを大事にしている会です。さまざまな方に興味を持っていただける企画を立てていこうと思っておりますので、ぜひ皆様からの忌憚のないご意見、企画をお待ちしております。

また引き続き、研究活動の活性化のためにも、ぜひ、教育の歴史に関心のある院生さんをご存知の方がいれば、この研究会を紹介していただければと思います。

この点に関わらず、ご意見等ございましたら、下記の連絡先までお寄せ頂ければと思います。

また、『通信』IIは年一回発行で大会報告を行う予定ですが、研究会メンバーが執筆された著書や留学体験などの情報・記事も載せていきたいと考えておりますので、何かございましたら遠慮なく、お知らせください。

問い合わせ先

メンバー登録・企画に関する連絡先

岩下 誠(いわした あきら) 青山学院大学・教育人間科学部
□150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-4 ☎□03-3409-8967 (研究室直通)
□iwashita@ephs.aoyama.ac.jp

『通信』IIに関する連絡先

三時眞貴子(さんとき まきこ) 広島大学・教育学研究科 教育学講座
□739-8524 広島県東広島市鏡山 1-1-1 ☎□082-424-6737 (研究室直通)
□msan@hiroshima-u.ac.jp